

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第20回)

渡辺 誠

26. 赤漆と黒漆

私は漆に負けるので困るけれども、研究上はやむを得ない。幸い十日町市立博物館の阿部恭平氏より市内の仏壇店の村山義郎氏を紹介され、大いに勉強させて頂いた。しかし以前懲りたことを思い出し、足首が被れないように座らないで、中腰でお話を伺った。

そのなかでも、漆の色のことは何にも分かっていないことがはっきりした。これは研究者全体にも言えることであり、赤漆はベンガラを混ぜることは分かっていたが、黒漆は墨を混ぜるぐらいにしか考えられていなかったし、私自身もそう考えていた。しかし村山氏は、そんなことでは漆が汚れるだけだと教えて下さった。そして購入先の福井県今立町の箕輪漆行を紹介して頂いて、早速出かけて見学させて頂いた。かぶれないようにとひやひやものであったが。

そして黒漆にするために、生漆にきわめて細かい鉄粉を混ぜていたが、その様子はふつつつと絶え間なくあぶくが湧いてきて、まるでお酒などのように醗酵しているみたいだった。ベンガラも酸化第二鉄であり、漆と鉄粉の化学反応の結果出来上がるものだということがよく分かった。

では縄文時代にはどうであったのか。これには面白い資料が青森県下の晩期の遺跡で2例発掘されている。しかもアンギンの袋にはいっているのである。第1例は五所川原市福泉遺跡、第2例は三戸町泉山遺跡出土品である。大きさは手のひらに入るくらいで、やや扁平なオムスビ状である。袋にされたアンギンの圧痕が明瞭に残っていて、その目は非常に細かい。なかには天然アスファルトと鉄粉が詰められているのである。天然アスファルトもまた黒漆の材料であったという。

そして長野県戸倉町円光房遺跡では、晩期の小型壺のなかに、土や雲母に混じて砂鉄が検出されている。調査者の翠川泰弘氏は、この砂鉄は眼前の千曲川のものではなく、他所から運ばれたものであるという。天然アスファルトが秋田県から広く運ばれているのと同じことなのであろう。その秋田県でも、弥生時代であるが鳥海町熊ノ沢遺跡から類例が出土している。

27. 漆漉しの和紙

村山氏の御教示はこれのみではない。漆の不純物を除くために、紙で漉す必要があるが、これには和紙のなかでも、奈良県の国栖紙しか使えないという。中国南京大学の熊海堂氏も、中国では強く絞ると裂けてしまうので、布しか使われていないという。

縄文時代のアンギンは強くねじれていて、多くの場合漆漉しに使われたものが残ったのである。古代中国で発明された紙は、日本に伝わり和紙として改良されたものであり、先人の知恵の結晶と言えるものである。

岩手県平泉町の柳之御所遺跡(平安時代)では、岩手県埋蔵文化財センターの発掘によって和紙と平織の布が重ねて使われている珍しい資料が出土している。これについては高橋与右衛門氏からいろいろ御教示を頂いた。

そして漆漉しの布は、平城京跡をはじめ各地で出土している。そして関連していろいろなことを調べることができたことは、面白いことであった。

紙についていえば、イタリアのポンペイ遺跡の発掘に参加した時に、アマルフィでアジアより伝わった紙漉きの様子を見て、和紙の特質をよく知ることができた。1例だけあげると、厚さが違う。その厚いのを、ネルなどの布に1枚づつはさみ、機械でプレスして脱水する。和紙の場合は原料にトコロアオイの液を混ぜる。このトコロアオイの相互反発性という性質によって、漉き舟のなかでも沈殿しない、積み重ねてもくっつかないのである。当然漆漉しには使えない。もっとも漆は英語ではジャパンというくらいで、日本の特産物である。

またある遺跡例が出土した時の新聞では、古代のおしぼりが出土したと報道された。漆のついた布を顔にあてたらと思うと、よほど面の厚い人が使ったのかと思うと楽しかった。

また柳之御所遺跡からは多くのものとともに、御簾編み用の木製錘が出土している。これはおそらく藤原秀衡公などの御座の前などに御簾がかかっていたことを示している。京都市伏見区の御簾屋にうかがったら、黄色い着色に使われているのは、なんと沢庵をつける時に使うものと同じだということであった。

アンギンや御簾などの編み方はモジリ編みとよばれるが、これは米俵や炭俵の編み方と同じであり、縄文の伝統である。米俵も紙と同じで、日本で改良されたものであり、大陸にはみられない。米とともに伝わったと考えるのは間違いである。

九州地方の組織痕土器の布目圧痕はアンギン圧痕であったが、大量にみられるため、目のサイズを調べる上できわめて有効であった。この時、油粘土で型をとり、計測した。後にレプリカ法とよばれるようになった。

アンギンの項を閉じるに当たり、上記の方々ばかりでなく、池畑耕一・小笠原好彦・大脇直泰・南博史・吉田泰幸・吉本洋子氏などにも、種々お世話になったことを明記しておきたい。

略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
 昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
 昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学
 昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
 昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
 昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
 平成元年4月 同上教授
 平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
 平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
 平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 131

上岩川遺跡群 ～ 秋田県三種町

吉川 耕太郎

2006年、秋田県北部、八郎湖干拓地の東側にある三種町の山あいの地で大きな発見があった。日本で初めて、珪質頁岩の採掘遺跡が秋田県埋蔵文化財センターにより発掘調査されたのだ。県道能代五城目線建設にともない事前調査された上岩川遺跡群である。北から鹿波渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡の6遺跡で構成される。



▲上岩川遺跡群

珪質頁岩は東北地方日本海側に多く産出する、黒曜石・サヌカイトとならぶ日本三大石器石材の一つである。黒曜石やサヌカイトは採掘遺跡がこれまでに発見・調査されていたが、珪質頁岩は河川敷で豊富に採集できるため、採掘の必要性はなかっただろうと考えられていた。しかし、上岩川遺跡群では合計9基の採掘坑が見つかったのである。地表下1mの段丘礫層を目指して採掘され、段丘礫層中の珪質頁岩原石を掘り出している。遺跡内には原石の集積場所や、おびただしい数の石器製作残滓が残されていた。石器総点数は133,999点にのぼる。土器はごくわずかで、完成品としての石器には石槍、石筥を中心に石鏃、スクレイパーなどが出土しているが、全体の0.01%にすぎない。竪穴住居跡も検出されず、生活の痕跡が乏しい。原石の採掘と石器製作が専ら行われた場所のようだ。わずかな土器片や残された石器の形態から、縄文時代前期～中期に断続的に営まれた遺跡と推定できる。

この遺跡群は私が発掘調査したわけではないが、県教育庁文化財保護室に勤務していたときに同僚らとともに分布調査で発見した遺跡群である。良質な珪質頁岩が分布する同町内には後期旧石器時代前半期の環状ブロック群である家の下遺跡があるため、旧石器研究を専門とする私は、新たな旧石器時代遺跡の発見を期待した。分布調査のため現地を訪れた私は、足もと一面に散らばる石器に目をみはった。「これは旧石器があるかもしれない」との思いでテストピットを設定し試掘調査を進めたが、旧石器時代の石器らしいものは1点も出土せず、剥片の顔つきや石鏃などの出土から縄文時代の遺跡である可能性が高まった。それにしても異様な石器の出土量であった。ただならぬ遺跡群だとこの予感がした。

発掘調査により上岩川遺跡群が徐々にその全貌を現した。私が現場を訪れたときに採掘坑らしき構構が確認されていたときの興奮は今も忘れられない。しかし、なぜ上岩川遺跡群では珪質頁岩が採掘されたのだろうか。付近の河原でも珪質頁岩の原石は拾えるはずだ。そう思い、河川を踏査した。たしかに拾える。しかし、量はさほどではないし、小振りなものが多い。

そこで遺跡群から出土した石器類を観察すると、特徴的な石質があるのに気付く。乳白色～黄褐色を呈する半透明の光沢を持った玉髄質の珪質頁岩の存在である。未成品の石槍の半数にこの玉髄質頁岩が用いられており、集積された原石にも玉髄質頁岩が多くあった。遺跡群から出土した原石は河原で拾えるものより大きく、直径50cmほどのものもある。これこそが、この地で縄文人がねらったものだったのだ。

秋田では「珪質頁岩はどこでも拾える」という先入観があるが、私が実際に県内の河川や段丘周辺を踏査してみても、石器に使われるような良質な珪質頁岩に出会うことはかなり難しい。まして玉髄質の大形珪質頁岩原石となれば、今のところ上岩川遺跡群のある地区の段丘礫層中だけだ。この地域に住んだ縄文時代の人々は、玉髄質頁岩に魅せられ、地域資源としての価値を見出したのだろう。玉髄質頁岩をまさに「上岩川ブランド」としたのだ。

秋田県でも他地域同様、縄文時代前期～中期には大規模な集落が出現、定住生活が本格化し、それに伴う地域資源開発と物々交換が促進したと推測される。当時の人々にとって地域資源を見出し開発するのは、他地域の資源を利用し豊かな生活を営むために重要だった。

上岩川遺跡群の石器製作の内容からは、玉髄質の珪質頁岩を素材とした石槍・石筥づくりが集中的になされていることが分かった。この石材は非常に硬質で石器製作には不向きなのだが、仕上がった半透明の製品は非常に美しい。石器製作に投下された「技」と「美」に価値があったのだろう。石槍や石筥を製作できるほどに大形な玉髄質頁岩や珪化作用の進んだ良質な珪質頁岩の原石産出地は、秋田県内陸部～奥羽山脈以東では現在のところ知られていない。しかし、そうした非産出地の遺跡からも玉髄質頁岩や良質な珪質頁岩製の石槍や石筥、石匙などが搬入品として発見されることがある。おそらく上岩川遺跡群のような採掘・製作地を拠点として、奥羽山脈をまたいだ広域な石器の動きがあったのではないだろうか。

上岩川遺跡群を通して、石器石材資源の開発拠点としての秋田県域の縄文時代を描出できないかとの思いが強まった。自分にとって、縄文石器研究の起点の一つとなった忘れがたい遺跡である。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは神田和彦さんです。



▲玉髄質頁岩製の石槍未成品

考 古学者の書棚

「山頭火 何でこんな淋しい風ふく」

早坂 暁 著／日本放送出版協会 (1989)

鈴木 孝之

私が種田山頭火という俳人の存在を知ったのは、早坂 暁 (脚本)、フランキー堺 (主演)によるNHKドラマスペシャル『山頭火 何でこんな淋しい風ふく』によってである。ちなみに、このドラマの脚本は、本書中におさめられている。

まことに恥ずかしい話ではあるが、このドラマを偶然目にするまでは、種田山頭火という人物の名前すら知らなかった。

まず始めに、山頭火の生涯について少し紹介しておきたい。明治15年(1882)山口県(現)防府市に生まれる。父は15歳で家督相続をし、大地主となる。同25年(1882・10歳)母フサ、自宅の井戸に投身自殺。父親の女道楽が原因とされる。同35年(1902・20歳)早稲田大学文学科に入学するも翌々年神経衰弱により中退。同42年(1909・27歳)結婚。翌年長男誕生。大正5年(1916・34歳)種田家破産、父は行方不明に。同7年(1918・36歳)弟縊死。同9年(1920・38歳)妻と戸籍上離婚。同14年(1925・43歳)熊本にて出家得度(曹洞宗)。観音堂の堂守となるも、翌年観音堂を去り行乞の旅に出る。以後、心臓麻痺で他界する昭和15年(58歳)まで幾度も旅をし続け、句を作り続ける。そしてその範囲は、九州・山陽・山陰・四国・近畿・東海・関東・上信越にまで及んでいる。まさに放浪の俳人といわれる由縁である。

これより本題に入る。本書の構成は次の通りである。

- 第1章 山頭火の風景 エッセイ (5編)
- 第2章 シナリオ「山頭火」
- 第3章 「秀句鑑賞～放浪行乞の日々～」 金子 兜太
- 第4章 ルポ「山頭火をめぐる」 磯部 勝
- 第5章 「行脚地図でみる山頭火の生涯」 村上 護

紙幅上、筆者の執筆による第1・2章にのみ触れる。第1章中の「母」は、山頭火の母の自殺に触れたものである。10歳の山頭火は、自宅の井戸から引きあげられる母のずぶ濡れの姿を目にしている。のちに僧となって行乞の旅を続けた山頭火は、母の位牌を白布に巻いて持っていた。「あんな死に方をした母は、成仏していない」との思いから、山頭火は母の成仏を祈っての旅を続けた、との見解を著者は述べている。

「山頭火を見た」は、昭和15年9月23日(著者が山頭火の日記から推測)、小学校4年生の早坂 暁が松山(山頭火終焉の地)の親戚の家に遊びに行ったおり、道後温泉近くの公園内の掘ばたで、酔って眠っている老人を見かけた。いとこに「変った俳句読みの爺さんだ」と教えられ、後にその人物が山頭火であったと知ったという。

そして同年10月11日、山頭火は自宅である一草庵にて、晩年盛んに口にしていた念願の「コロリ往生」をとげる。

著者は、まさに最晩年の山頭火を「見た」のである。

第2章のシナリオ「山頭火」は、ドラマのために書かれたもので、本書の核である。行乞という旅の様子や、著者の思い

描いた、自由律俳句の俳人としての山頭火の生き様などが表現されており、実に興味深い。たとえドラマを見ていなくとも、本文中に放映時の画像が数多く掲載されており、この章だけでも必読といえよう。

つづいて、シナリオ中にみられる俳句の中から、三句のみではあるが、以下に紹介しておきたい。

分け入っても分け入っても青い山 (大正15年 44歳)

この句は、山頭火の作品中でも最も知られ、親しまれているものの一つではなからうか。この句の前書きに「大正十五年四月、解くすべもない感ひを背負うて、行乞流転の旅に出た」とある。本句は、この旅でよまれた第一句である。

「この句の良さ、懐さは、歩いている人間の姿が見えてくること 一中略一 四十五歳、すでに中年だが、気持ちとしては青年のような多感な男の姿があり、ただひたすらさまよい歩くという「放浪者」というものの原型がある」との指摘がある(金子兜太 本書第3章)。しかし、私は本書を読むまでこういった解釈は思いも及ばなかった。ドラマ中でこの句を目にした時も、その後、句集を読んだ時も「歩いている人間」の姿は見えなかった。私に見えたのは、歩いている人間(山頭火)の目を通して見た山々と、その青さであった。今回、本書で再読しても同様であった。この句、ひいては俳句そのものに対する、私の読み込み・理解の浅さ故であろうか。

まったく雲がない笠を脱ぎ (昭和5年 48歳)

晴れ渡った空の下を歩き続け、立ち止まって笠を脱ぎ空を仰ぐ。やはり私には、仰ぎ見ている人物ではなく、見ている人物(山頭火)の目に映る青い空が思い浮かぶのである。

どかりと山の月おちた (昭和7年 50歳)

「どかり」という、満月の大きさを表現しているであろう言葉が実に印象的である。「自分の心のうちの充足気分」(金子前掲エッセイ)が感じられて心地よい。

なお、本書とは離れるが、第5章の執筆者である村上 護氏は、山頭火の俳句を選句し、それらの初句を基にした索引を付すとともに、随筆(15編)、巻末に年譜と氏による解説を併せた『山頭火句集』を編まれている(ちくま文庫 1996年)。山頭火に興味をお持ちの方は、こちらも併読されたい。

アルカ通信 No.138

発行日 2015年3月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp